Withコロナ時代の日本語教育とつながり
―交流記録―

占部智香（長崎国際大学）

１．はじめに

2019年12月から現在に至るまで世界で猛威を振るっているコロナウイルス。多くの国や、地域で海外渡航が制限されるなどの感染対策が取られている。そのため、日本語教育だけでなく、学校や会社など多くの場面でオンライン化が進んできた。

筆者は「Withコロナ時代の日本語教育とつながり」と題し2021年6月から2022年1月までロシア・ハバロフスク市太平洋国立大学の日本語を学ぶ学生との交流企画をオンラインで進めてきた。また、この企画は、長崎国際大学の卒業生であり、太平洋国立大学で日本語教師をしておられる石井雅也先生の協力を得て行ったものである。

ロシアは、世界最大の国土を有しており、国内でも大きな時差が発生する（図1）。また、広さゆえに気候や食などの様々な文化に大きな開きがある。今回交流を行った太平洋国立大学があるハバロフスクは、ロシア極東部で最大の都市である。日本の北海道よりも緯度が高く、主に交流を進めていた冬には気温もかなり下がり、マイナス何十度を記録することも多い（マルケス，2004）。

まず、太平洋国立大学の日本語教育についてまとめる。太平洋国立大学では、2021年4月時点で通常通りの対面授業に戻っていた。しかし、ロシアに入国できず日本にいる石井先生やその他のロシア人日本語教員の授業のみがオンラインという形になっていた。日本語の授業は、どのようなものを行ってもよいとされており、教科書の選定なども担当教員それぞれに任せられているという。

今回、主に交流を行った学生は、日本語学科翻訳・通訳コースの学生であり、日本語のレベルは、日本語能力試験N5からN3の学生たちである。石井先生の授業では、教科書は、1年生は『日本語初歩』、2年生は、『中級へ行こう』、3年生は『中級を学ぼう中級前期』を使用している。

図1　ハバロフスク市と佐世保市

２．本プログラムについて

今回、交流を企画した主な目的は2つある。1つ目は、コロナ禍における日本語教育について知ること。日本国内だけではなく、海外の日本語教育の場に触れ、普段聞く事のできない日本語教育の今を知ること。そして、2つ目はオンラインでの活動を通して“つながり”を作ることである。これらの目的を基に石井先生へのインタビュー、アンケート調査、ワークショップ、2回に渡っての交流会を行った。主に筆者の所属する長崎国際大学の学生たちと石井先生が教えておられる太平洋国立大学日本語学科翻訳・通訳コースの3年生の学生たちとともに行った。

３．石井先生へのインタビュー調査

３－１　目的

筆者は、これまで授業で外国語を学び、教えてもらい、学習する立場にあった。そのため今回は、外国語を教えるという立場の考え、感じたことなどを知りたいと考えた。また、将来、日本語教育に携わることを目標としていることから、日本語教育についての知識を深めるため

やこの活動を耳にした同じような方々に何らかの影響を与えることを目的とし、日本語教師である石井先生にインタビューを行った。2021年10月5日、コロナウイルス流行による渡航規制のため福岡県からロシアの学生たちにオンラインで授業を行っているということで感染対策をして長崎国際大学のある佐世保市内で直接石井先生にお会いすることができた。

３−２　インタビュー

石井先生は、長崎国際大学を卒業し、福岡の日本語学校に2年間常勤講師として勤められ、その中で学生との向き合い方に疑問を感じ、イギリスで6か月間日本語教育を学んだ後、現在の太平洋国立大学の日本語教員となっておられる。今回、そんな石井先生へ次のような内容でインタビューした。①なぜ日本語教員になろうと思ったのか、②日本語教員をしていて心がけている事、③日本語教員をしていて壁にぶつかった経験である。また、コロナ禍の日本語教育、特にオンラインと対面の授業形態についてディスカッションをしたり、先生の意見を聞いたりした。

一つ目の「なぜ日本語教員を目指したのか」という質問に対して石井先生は、以前から外国人と関わる仕事がしたいと考えていて、長崎国際大学で日本語教員になる資格が取れるということを知ったのがきっかけだったという。次に、「日本語教員をしていて心がけている事」として正しい日本語を使うことをあげられた。筆者も石井先生も、九州出身であるため特に、普段から方言を話すことが多い。日本語学習者が教科書などで聞いている日本語とアクセントやイントネーションが異なり、外国人にとっては、混乱を招くことがあるためだ。次に、「日本語教員をしていて壁にぶつかった経験」を聞いた。それは、日本語を教えるうえで、学生が分からないことを示す仕草や表情をした時だという。その場合の対処法として、他の理解できている学生に説明をしてもらったり、その場でまた違った例文を考えたりするとおっしゃっていた。いきなり知識が必要になったりすることや、普段なんの疑問もなく使っている言葉でもいざ説明するとなると、どのように説明すると良いか迷うことも多くあるそうで、日本語を分かりやすく教えるということはとても難しいと感じた。

３−３　授業形態についてのディスカッションと気づき

近年コロナウイルスの影響でオンライン授業が増加している。そのことについてもディスカッションをしたり、先生の考えを聞いたりした。最初に、オンライン授業の良い点と悪い点をそれぞれあげていった。良い点としては、授業内でゲストを簡単に呼ぶことができるということである。また、資料など簡単に提示することができる点だ。欠点としては、学ぶ場で設備が整っていないこと、個人で設備が異なるため差が生まれること、ビデオをつけていなければ相手の顔を確認できないということがあげられる。特に、この欠点は、学習者の意識に直結する問題であり、やる気がそがれてしまう原因にもなり得る。また、ビデオについては、石井先生は、ビデオをつけることでインターネット環境が悪くなることがあるため、つけてもつけなくてもよいという授業形態をとっているそうだ。言語を学習するうえで、口元の動きは大切である。それをはっきり確認するには、やはり対面での学びが良い。石井先生によると意欲の違いは、授業形態ではっきりわかるという。

筆者は、大学での言語の授業は、zoomを使用した形態と、動画を視聴する形態の授業を経験していた。特に動画を視聴する形態の授業では、途中で停止したり再生速度を変えたり、繰り返し確認したりすることができる。しかし、今回インタビューを行ったことで違った視点からの意見に気づき、考え方を広げることができた。オンラインでの言語学習には、否定的な考えしか持っていなかったのだが、言語学習では、時と場合によって長所を最大限に活かせる適切な学習形態を選択できるのではないかという考えを持つことができた。

3－4 インタビュー全体を通しての気づき

筆者は、今まで日本語教育に携わりたいと考えてはいたが、どのような方法があるのかどのような職場環境があるのか、どのような働き方があるのかということを詳しく知る機会がなく、イメージが全くできていなかった。

特に、石井先生の日本の日本語学校や日本語教育を学んだイギリス、太平洋国立大学での経験を聞く事で、自分の未来の選択肢がよりはっきり見えたと感じた。そして、近年、海外の日本語教育がどのように行われているのか、特に日本語学校がどのような場所なのかを先生の経験を聞くことを通して、働く側の目線から初めて知ることができ、授業形態などに関する課題や日本語教育に関する自分自身の課題も多くあることを気づかせていただいた。

4．アンケート調査

4-1　目的

アンケート調査は、主にロシアでの日本語教育について知るため、また、交流やワークショップを行う前に日本に対しての思いや印象などを知るために行った。アンケート調査の対象は、より多くの人の回答を得たかったため、石井先生の協力で太平洋国立大学の日本語を学ぶ学生だけでなく、現地にある日本センターでもアンケート回答の協力を呼び掛けていただいた。日本語を学ぶ学生以外にも調査を実施したため、太平洋国立大学で日本語を学ぶ3年生の学生に質問項目の翻訳を依頼した。その結果13歳から55歳までの幅広い年齢の人から68件の回答を得ることができた。そのアンケート結果には、新しい発見や驚きがあり、それまで持っていた考えを覆されるようなものもあった。

4－2　アンケート結果

アンケートでは、次のような質問をした。①日本文化で知っていること、②日本文化で好きなもの、③日本語を学び続ける理由・モチベーション、④ロシアのことで日本人に知ってほしいことの4つである。①と②に関しては、主な項目をあげて選択式とし、該当するものがない場合は書き込んでもらうという形をとった。

①の質問では、次のような結果が出ている（図2）。筆者の予想では、回答者は、若い世代が比較的多いということで、アニメの項目が最も多くなるとしていた。

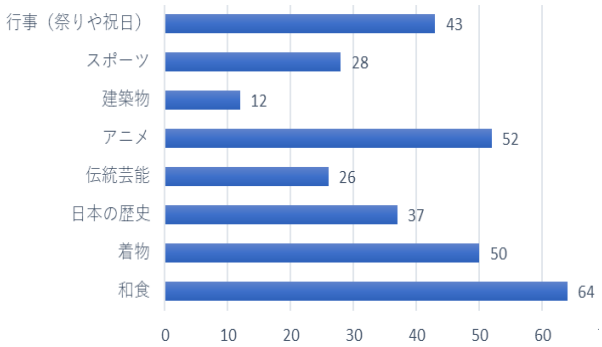

図2　アンケート結果（日本文化で知っていること）

そして②の質問では、次のような結果が出ている（図3）。

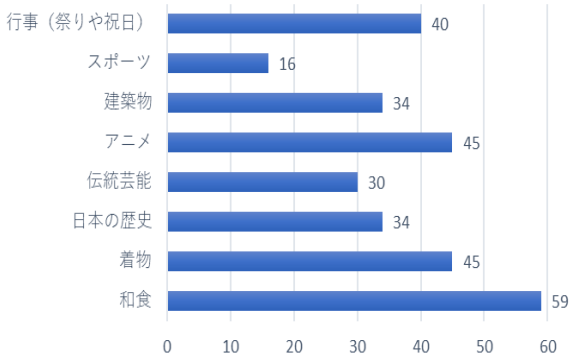

図3　アンケート結果（日本文化で好きなこと）

①と②どちらの質問でも、和食が最も多い回答であった。また、選択肢以外のものもたくさんあげられており、音楽や小説、化粧品や芸術面など様々な角度から日本が見られていることを感じた。

③の質問では、通訳者や教員として日本語を将来使っていきたいと考える人が圧倒的に多いことが分かった。他にも、日本へ旅行に行くためや趣味である漫画などの日本文化を充実させるためという回答もあった。

④の質問では、ロシア語とロシア料理に関して知ってほしいという回答が多かった。

今回行ったアンケートを振り返り、最も印象に残った回答がある。それは、③の日本語を学び続ける理由・モチベーションに関しての「日本語に恋しているため仕方がない」という回答だ。その回答を見て、より多くの日本語学習者にもこのように思ってもらうために今回の活動も最後まで両者ともに良いと思える交流をやり遂げたいと思った。

５．能楽ワークショップ

５－１　目的

日本文化について知ってもらうという目的のもと、事前に行った太平洋国立大学やロシア日本センターでのアンケート結果や講師の先生方のご都合を考慮し、能楽に焦点を当てたワークショップをすることに決定した（図4）。

図4　能楽ワークショップのため作成したチラシ

５－２　概要

対象は、ロシアの学生たちと長崎国際大学の学生たちである。11月8日19時30分から90分間のワークショップを以下の流れで行った（表1）。

表1　能楽ワークショップの流れ

①講師の先生による能の歴史に関する講義
②能面や小鼓を用いた実演と紙の能面づくり
③能の動画視聴
④質問コーナー

ワークショップでは、事前に印刷をした能面を使用した。目の部分をくりぬいて輪ゴムをすると実際にかぶることができる。本来能の面は、どの角度から見ても視線を感じる作りとなっており、今回使用した紙の能面でオンラインという形でも多少なりとも能を体験することができるようにしてみた。

５－３　反省

90分間の時間をとって行ったのだが、③能の舞台動画視聴後に質問を受け付ける時間がほとんど無くなってしまった。そこが反省点だったが、交流会に向けての改善点を見つけることができた。ワークショップ後のロシア側アンケートでは、日本語の回答も多く、「新しい文化を知ることができ興味深かった」、「能面が一番印象に残った」、「能楽について知ってはいたが、見たことはなかった。機会があれば見に行きたい」という声があった。

６．交流会

６－１　目的

交流会を行うにあたって、最初にロシア側、日本側それぞれが得られることは何かを考えた。ロシア側の学生にとっては、日本語の会話による日本語能力の向上、日本の生活について知ること、ロシアについて日本に発信する力というものだ。また、日本側に関しては、学習者に対する言葉遣いや言葉の選び方の学習、ロシアの生活やロシアについて知ることというものである。さらに、この交流会は、双方にとってコミュニケーション力を発揮できる機会にしたいと

考えた。以上のことを意識しながら達成できるように交流会の計画を立てていった。

６－２　概要

今回2日に渡って行った交流会は、石井先生が日本語の授業を受け持っている3年生約15名と筆者が声をかけ、協力してもらった長崎国際大学の2年生約6名との交流会である。長崎国際大学側の学生の中には、ロシアを訪れたことがあり、ロシアという国が大好きだという学生も参加していた。2日間とも時間は、ロシア、日本での大学の授業1コマ分である約90分間で、ほとんど同じメンバーで行った（表2）。

表2　交流会の流れ

1日目（12月18日10時30分～）
①名前、年齢、趣味などを伝える自己紹介 ②企画者の筆者による日本についての発表 ③ブレイクアウトルームに分かれてロシア側の学生による発表 ④フリートーク
2日目（12月20日18時～）
①自己紹介 ②筆者による文化や建築物についての発表 ③ブレイクアウトルームに分かれてロシア側の学生によるロシア語講座

1日目の交流会では、自己紹介を済ませた後、筆者が長崎国際大学のある佐世保市や長崎県について、主に観光の面から発表を行った。各グループに分かれてからは、ロシア側の学生からハバロフスク市について町の博物館を紹介するなど発表があった。両方の発表を聞いた後で、フリータイムとしお互いに自由に話す時間とした。そこでは、お互いの発表について質問をしたり、共通の趣味などについて話したり、それぞれの国の生活や天気など些細なことまで話した。

2日目の交流会では、再度自己紹介をし、筆者が日本全体について文化や建築物など事前アンケートを基に発表を行った。日本文化で知っている事、好きなことで最も少なかった項目であった建築物に焦点を当て世界遺産になっているものなど有名な日本の建築物を紹介した。アンケート結果で建築物は、最も回答が少なくなった項目ではあったが、日本には多くの世界に誇れる建築物があると考えたため紹介を行った。その後は、1日目とほぼ同じで、ブレイクアウトルームに分かれ、簡単なロシア語講座としてロシア語をグループごとに教えてもらった。筆者は、今までロシア語に触れたことがなく、発音はおろか聞き取ることすらとても難しく感じた。

参加者からは、「楽しかった」「普段と違い新鮮だった」などの声や「機会があればもう一度交流したい」という声を貰った。交流した学生の中には、SNSでつながったという人もおり、プログラムが終了した後でも交流が続いている。

今回、楽しみながら交流ができる場を作ることができたと感じた。また、このように多くの感想を貰い、6-1で目的として記した特にコミュニケーション力を発揮する場としての良い機会も作れたのではないかと感じた。

７．まとめ

７－１感じたこと

今回、活動を通してたくさんのロシアの学生や海外で活躍する日本語教員の先生と実際につながりができた。また、筆者はロシアという国の人と関わりを持つのが初めてで、分からないことや不安なことがたくさんあった。特に、言葉の問題は、全くロシア語を知らない状態であったので交流会の時は緊張が大きかった。しかし、多くの人による支えで無事企画を終えることができた。企画を進めていく中でもやはり言語による壁を感じた。ロシア語でのアンケート回答や交流会で行ったロシア語講座など、太平洋国立大学の学生にサポートをしてもらったが、アンケートや発表資料を作成しているときにどのように表せば正確に伝えられるか分からず、苦戦した。

７－２反省

今回の企画の大きな反省点として交流会のため作成した資料は、日本語の振り仮名が多く、理解しづらかったという点だ。交流会1日目は、理解を深めるには、どんな資料を作成すればよいか分からず、平仮名や振り仮名がかなり多く

なっていた（図5）。実際にコミュニケーションをとる前の段階で製作したため、学生たちがどの程度日本語を話せるのか、事前情報だけではよく分からなかったというのも原因のひとつである。画像も多く使用しており、伝えたい情報が少なくなってしまっていた。しかし、1日目のロシア側の学生の発表や石井先生の意見を受け、平仮名や振り仮名ばかりの資料では、逆に気持ちよく読めず、不快な気持ちにさせることもあると知った。そのことから2日目に資料を作成しなおすなどした（図6）。

・出島（でじま）

日本の江戸時代（えどじだい）に貿易（ぼうえき）をしていた島（しま）。当時（とうじ）日本でたったひとつだけの開かれた港（みなと）でした。

図5　修正を加える前の交流会1日目の資料

和食はUNESCO世界無形文化遺産（Intangible Cultural Heritage）にも登録されており健康（けんこう）に良いことや見た目の美しさなどから注目を集めています。多くの食材を季節に合わせて使うことが特徴（とくちょう）です。

四季（しき）の違いがはっきりある日本特有のものだと思います！

図6　修正を加えた交流会2日目の資料

７－３　今後

将来日本語教員を目指す身として今回新しい発見が多く、新しく得た知識が今後の学習のモチベーションになると感じた。例えば、日本語教員は、日本語を教えるだけではないということも新しい発見だった。学習者の生活面でも日本語教員が支えることが特に日本語学校では多いという。

そして今回最も感じたのは、言語学習には、慎重な言葉選びが必要だということだ。また、人の考えをより正確に伝えるには、やはり人が必要であり言語を学習するということは、人と人との大きな懸け橋になり得ると思った。改めて、重要な仕事を目標にしているということを自覚した。

冒頭にも述べたように、今回の活動は、ほとんどオンラインで行った。このオンラインというのは、コロナ禍の近年世界中で広く普及した授業形態である。活動の中の特に石井先生とのディスカッションを通してオンラインでの活動には、普段はできないようなことも可能にする良い面があることを知った。そのことから、今後コロナウイルスが関係していない状況でも利用される機会が増えるだろうと予想する。自分が今回行った活動は、今後のそういったオンラインでの活動に役立つ経験となったのではないかと感じた。

参考文献

(1)　ヘロン・マルケス（2004）東眞理子（訳）『目で見る世界の国々　ロシア』国土社